

2022年度多摩市一般会計歳入歳出決算に対し、認定すべきとの立場から意見討論いたします。

昨年度、4月に市長選挙が行われました。結果は、阿部市長の再選となり、行政にとっては従来踏襲で安定的な市政運営が継続できてほしかったのではないかと思います。大きな波風は立たず、無難に一年をやり過ごすことができたとも言えるかもしれません。私も候補者のなかで、人権平和を重視する政治姿勢のある阿部市長に最も共感でき、自治を豊かにしていこうとする方向性も共有できるため、支援をしました。

一方、昨年の市長選では、「4期は長すぎる」という批判もありました。その批判が一概に当てはまるとも思いませんが、ただ、現状に対し、「変わってほしい」「変わる必要がある」と考える理由が少しは理解できる部分があります。なぜなら、私にとっても、阿部市長が本質的に取り組むべき課題から目を背けているのではないかと感じることもあるからです。折に触れて、「粉骨砕身で行財政改革に取り組んでいく」という趣旨の意気込みを述べられますが、その割に、ここぞという時に期待される市長のリーダーシップが十分発揮しきれていないのではないかと、もしかすると、いつしか市長の軸足も「保身」という言葉よりに傾き、「貫くべき」改革に必要な決断や判断を先送りしているのではないかと不信感を拭い去れない印象を抱かざるを得ないこともあるからです。市長は就任当初、「お願いする政治」から「ともに汗を流す政治」へ切り替えていかなければならぬとおっしゃっていました。当時の問題意識を、市長は就任以来、どのように実践し、継続されてきたのでしょうか。「ともに汗を流す政治」は市民の声を聴くことから始まるのだと思っていますが、「聴く力」の活かし方に市長の経営手腕が問われていくことと思います。

さて、多摩市は財政状況的には全国の自治体と比べても恵まれた状況にあるとはいえ、今さらのように語られる人口減少やら、世界最速で進展しているとされる高齢化、国や東京都の力を得て開発してきた高度な都市基盤の更新、さらには、新たに私たちが向き合っていかなければならない地球環境の悪化による気候変動問題など、誰が首長になろうが、議員になろうが、取り組まねばならない課題は年々重たくのしかかり、深刻になっているとも思います。多摩市はかねてから、行財政改革のプランの策定、更新、進捗状況の管理を行い、計画的、堅実に財政運営に努めてきたことが功を奏していると捉えています。今まで積み上げてきた行財政改革の成果を台無しにすることはできません。今後、人口が減れば、税収も減りますし、そして、職員の数も減っていく中で、ますます前例踏襲の行財政改革では通用しなくなっていくことを改めて指摘するとともに、だからこそ、デジタルトランスフォーメーション、DXを進めていく必要もありますし、同時に、「公務」として果たさなければならぬ役割と責任をしっかりと見極めながら、「公務員」として果たすべき役割をしっかりと、考えることも求められると思います。「民間活力の導入」はまさに「公務とは何か」を問い直

すところを起点とした議論の上に成り立つのです。その議論は議会も共にしていくことが必要です。

そして、これからの時代を見据えて、「こうあるべき」「こうあってほしい」という状況と状態に一步でも近づけるようなビジョンを持ち、そこに向けた強い信念があつてこそ、着実な行財政改革が進んでいくのではないかと感じます。それは、単に、無駄遣いをなくすという発想では立ち行かない改革です。私はこれまでも、「今だけ、自分だけ」にならない市政運営への切り替えこそが必要であり、それに伴う改革こそ強力なリーダーシップが求められると考えてきましたが、市長のお考えはいかがでしょう。「ともに汗を流す政治」を担う市民もまた「今だけ、自分だけ」になっていないか問うことを原点にしていくのだと思います。

先週の土曜日、諏訪・馬引沢のエリアミーティングに出席し、「SIM たま」を体験してきました。市政に関心のある市民の「気づき」をさらに促すきっかけになるものとして、とても良い試みだと思いましたが、場をリードする職員の人材育成と、活用の工夫でさらに進化していくように感じました。この取り組みもまた、「ともに汗を流す」取り組みの一つであり、「地域協創」という表現に結びつく事例をつくっていくのかもしれませんが、「公務とは何か」をしっかり意識して取り組みを進めていくことも求められますし、場づくりにも税金が使われていることをもっと意識してほしいとも思いました。

市長は今定例会の私との一般質問のやり取りで、リーダーシップには高い理想を掲げること、決断すること、責任を取ることが必要で求められることとおっしゃっていました。どうか、貫いていただきたいと思います。もちろん、阿部市長はこれまでも、「お願いする政治」ではなく「ともに汗を流す政治」への切り替えにも取り組んできたことと思いますが、ここにさらなる進化があるとすれば、市長は市民、あるいは議会に対し、何を望み、期待していくのでしょうか。財源の拡大が難しい今、何かを始めたり、増やしたりすることは、容易なことではなく、否応なしに取捨選択が求められる時代にあることを私たちはまず意識しておくべきなのだと思います。事業の廃止や縮小、いかに財源を確保するかについても現実的に考えていく視点を常に持ち合わせておきたいと思っています。

以下、改めて決算審査で取り上げた二つの事業のことについて触れておきたいと思えます。一つは老人福祉センター事業費、一つは公園管理経費です。詳細を述べることはしませんが、私が指摘したかったことは、事業評価をする際、費用対効果、事業分析の視点で正しく実態把握のできる成果指標設定を考えなければ、私たちが見なければならぬ問題点や市民と共有しなければならぬ課題の本質が見えづらくなり、ともすれば見落としてしまう可能性があること。それにより、改善と改革が遅れる可能性が大きいこと。また、本来で

あれば、もっと以前の段階で必要な予算を確保し、対応をすべきだったことを後回しにした結果、余計に費用を要することになっている事例が出てきているということです。既に、「枝葉」を落とすような格好で行財政改革を進めても、業務の「質」は改善されないどころか、市民からは、むしろ「質」の低下が指摘されるような状態も見受けられます。行財政改革の成果が、本当に「最小の経費で最大限の効果」が発揮できる市政運営につながってきたのかを改めて問い直すべきだと思います。将来的な財政負担を十分に勘案せず、アドバルーンを次々あげることができた時代とは違うのです。

現在、第6次総合計画の策定が進められ、最終段階を迎えています。何よりも計画の推進に必要な「行財政運営」をしっかりとリードしていくのが市長だと思います。この計画の上位にある「基本構想」から「市民主権」という言葉が消えてしまい、私にとっては阿部市長のこだわりを意図的に手放したのかなとも邪推してしまいましたが、「市民主権」が「身勝手の利己主義や自己中心主義」とは隔たりのある位置で使われる言葉であることを今一度確認しておきたいと思います。「市民主権」とは何か。その言葉の持つ重みを共有しておきたいです。

そして、どうか、市長にはよりよい行財政運営を進めていくにも、組織を支える人材を大事にし、市民の願う住みよい多摩市を守っていくためにも育成してほしいと思いますし、そのために、職員の意識調査をしていただき、客観的に組織の状態を捉える努力をしていただきたいです。そのことが、次の時代のまちづくりを進めていくとき必要な条件整備を考えていくヒントにもなっていくと思うからです。

加えて、今、子どもや若い世代が希望や夢を持ちにくくなっている社会になってしまった現状を変えていくこと、私たちの生き方暮らし方を問い直すことを通じ地球環境問題への取組みを進化させていくことをはじめ、庁舎建替え、日医大永山病院の移転問題などなど直近に迫り取り組まなければならない課題についても、スピード感をもって質の高い議論をしていかなければならないと思っています。

だからこそ、よりよい情報公開、情報提供、情報共有をお願いいたします。「情報」の質こそが、今後の議会における議論はもとより、「ともに汗を流す政治」にしていくための、議論の方向性を大きく左右し、結論の行方にも関わってくることを改めて強調したいと思います。

以上、阿部市長の4期目が「長すぎる」という批判を鮮やかに打ち砕いてくださることを心より期待し、2022年度多摩市一般会計歳入歳出決算、その他特別会計歳入歳出決算等についての認定の討論といたします。